



さらなる発展に向けて

町田まちづくり市民会議 議長

桜美林大学理事長・学長

佐藤 東洋士

新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり、2011年が皆さまにとりまして素晴らしい年となりますよう、心からお祈りいたします。

昨年12月18日に、事務局長の任を長らくお勤めいただきました渋谷謙三様が突然ご逝去なされ、事務局長として重責を担われましたご労に対して深く感謝するとともに、ご遺族の皆様には心からお悔やみ申しあげます。

渋谷事務局長は本会議発足時に発起人のおひとりでありました。1997年に町田市の要請をきっかけに本会議が発足し、翌年には「町田市都市計画マスタープランへの市民提案(通称マザープラン)」を町田市に提出しました。その後の活動においても、皆様とともに市民目線での活動を続けてまいりました。また、渋谷事務局長は副議長としてもご活躍いただき、本会議の発展に尽くされました。本会議がこうして組織化され、発展して参りましたのも渋谷事務局長の果たされた功績の一つといえるのではないのでしょうか。



昨年を振り返りますと、世界経済の大きな嵐が吹く中で、経済のみならず、政治の混乱や近隣諸国との摩擦など、大変厳しい年でした。

わが町田に目を向けましても、少子高齢化の問題、雇用の問題、福祉の問題、環境問題、産業の活性化の問題など、様々な諸課題を抱えております。

本会議は創立以来、「まちづくりは市民が主人公」という基本理念を掲げつつ、「市民が主人公のまちづくり」を目指して活動を続けてまいりました。このような難しい時代だからこそ、いっそう本会議の活動は地域にとって重要なものとなり得るでしょう。

わたくしどもが果たすべき役割を考え、行動し、チャレンジすることによって、明るく人々のこころのかよい合う「町田」の未来も見えてくるはずです。渋谷事務局長のご逝去は、本会議にとって大きな損失ではありますが、その遺志をわたくしどもはしっかりと受け継ぎ、さらなる町田の発展のために市民、事業所、行政の皆様と力を合わせて前進しようではありませんか。

本年も町田まちづくり市民会議の活動のために、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

第89号目次

さらなる発展に向けて	佐藤 東洋士	1
生涯学び続けた心と行動力	柿原 ユキ子	2
渋谷謙三さんはわたしの“まちづくり”の先生だった	大橋 成夫	3
渋谷謙三さんの思い出に寄せて——追悼文集——		4
渋谷謙三さんが残したもの	湯浅 起夫	6
「町田の紙上個展・お宝紹介」シリーズ:3		7
事務局だより・編集後記		8

追 悼

生涯学び続けた心と行動力

町田まちづくり市民会議 副議長 柿原ユキ子

12月7日火曜日、午後1時からの定例会。中央公民館ロビーには出席者8名の顔。午前中に印刷した会報『まちづくりの環』がいつものように配られる。今月の議題が進み、話題はいつしか、私たちがかつて提案した都市計画マスタープランの市民版マザープランに。夢のある、楽しい美しい親しみやすい、魅力ある町田の玄関、中央商店街づくりを論じたことをふり返り、しかし、私たちには残念な思いだけが残っている。現在は、大型店、ゲームセンターが並ぶ町田の中央商店街。昔からの商店は数件になってしまった。「(和菓子屋の)中野屋の草餅のおいしいのは昔から有名」と謙三さんが言われた。近いので、そっと買いに行き、試食しながらの会合だった。

それから11日後に、悲しい知らせがとどいた…

渋谷謙三さんといえば、23万人の個展、そして今がある——そのような強い印象です。あなたは「誰もが安心して住み続けることができる活気に満ちた魅力あるまちづくり」を



2009年8月24日(月曜日)における
生ごみリサイクル交流会の分科会にて

大きな願いとして、時代のニーズを先どりし、多様な市民ニーズにたいして行政側が把握不足のないよう、広い視野から研究され活動しておられましたね。幅広い分野での発想、問題にたいする見識の高さ、相手を説得しようとする情熱と熱心さに感銘を受け、そうした貴重な意識の持続に敬服しておりました。常に未来志向の夢を描き、希望に燃え、実践化を図ろうとする強い信念を秘めておられましたね。

平常も、無駄のない会話の運びで、まちづくりの理念として、こうありたい、そしてこうあってほしいと、「まちづくりは人づくり」、まさに人間教育に徹しておられました。その教えの影響によって、現在、知的好奇心に燃え、自分たちの住むまちを豊かなまちにとの願いで、多くのひとたちがいろんな分野でまちづくりに取り組み、かかわっていると思います。一生懸命のあまり、相手にたいして厳しい口調になる時もあり、そんな時は抑え役をさせていただいたことを思い出します。

最近、特に感じていましたことは、自己のアイデンティティとは何かに触れ、それを家族、地域、社会、国、世界とのつながりのなかで実践し、こうあらねば駄目なんだと、共有を力説しておられましたね。

謙三さん、あなたは人生の仕上げを輝いて達観できた人。学ぶ心と行動力を持ち続けたあなたのような存在こそ、まさに生涯教育の体現者といえるのではないのでしょうか。

こよなく
町田を愛し
国を愛し
世界を愛した謙三さん
安らかにお休みください

合掌

渋谷謙三さんは わたしの“まちづくり”の先生だった

会員 大橋成夫

まさに青天の霹靂というのは、こういうことなのかも知れません。副議長の岩上さんからのFAXで、渋谷さんが12月18日に亡くなられたとの報を読んだ私の第一印象でした。10日前の7日、市民会議の例会に出席され、会議中に若い桜井さんと熱心に話しておられたのが目に浮かびます。私にとって、渋谷さんは“まちづくり活動”の先生であり、個人的には兄貴分のような方で頼りがいのある方でした。

私は、1987年5月に14年住んだ世田谷の砦から引っ越して、玉川学園に住み始めました。その年の11月に「町田フォーラム21」の会合の案内をいただきました。その時初めてお会いしました。いまその案内を見ますと「町田フォーラム21研究会の御案内※」とあり、代理幹事 渋谷謙三となっています。テーマは「魅力ある街づくりに欠かせない地域活動——現状の課題 - 危機を乗り越える方策は——」とあります。渋谷さんの肩書きは、「代理幹事」となっていて「代表幹事」ではないのです。代表幹事は、10数年前に惜しまれて亡くなられた薬師寺光明さんでした。

渋谷さんは、多くの“まちづくり”に関わられました。いま考えて見ると“代表”には就いておられないことが多いのに気がつきました。長年のごみ活動にしても代表にはなっておられなかったと思いますし、面倒な事務局や裏方の役割を担うことが多かったようです。地域活動にも積極的で、ご自宅の旭町での“花壇コンクール”参加家庭の中心であったようですし、もっと溯れば町田サッカーの草分け的存在であって、本来ならば“町田サッカー協会会長”であって不思議ではなかったでしょう。

当市民会議も、まさに代表という存在でありながら、事務局長として対外的な交渉・調整など厄介な仕事をこなしていただいて、会員は大変助かっていました。若い会員や女性会員にもやさしく気配りされ、年配者とも分け隔てなく対応しておられた様子を見て、私など随分と参考になりました。「事に公正、人には公平」な方でした。

町田生まれで、市職員でしたから町田のことは良くご存知でもありましたが、それ以上に町田を愛する心の熱い方でした。まちづくり活動は、ごみ問題だけでなく広範囲に亘って考え行動した方で、その人脈は多岐に広がっていました。いつも熱く人懐っこく、クラシック音楽をはじめ広く文化にも造詣があり、また著作の『バクテリア課長奮戦記』は文章も巧みで楽しく、次作を待ち望んでいたひとりでした。

お通夜では多くのみなさんが“町田の民間人では一番有名な方だった”と異口同音に話していました。町田市は、ほんとうに惜しい方を亡くしました。

本紙「まちづくりの環」12月号では、“ゼルビア”のJリーグ入りに頑張ると宣言され、「町田ゼルビアの悲願達成にお力を!!」と、熱のこもった年賀状を掲載されました。やり残したことは、まだまだ一杯あったことでしょう。渋谷さんの“まちづくり”にかける情熱を、私たちは引き継いで活動していきましょう。 合掌

※「町田フォーラム 21 研究会」(1987年～1993年)は、町田では最初のまちづくりの市民団体

渋谷謙三さんの思い出に寄せて——追悼文集

渋谷謙三さんと初めてお会いしたのは、1997年、町田市都市計画マスタープランへの市民意見提出を目的とした当会「町田まちづくり市民会議」発足のときでした。その後も、公私ともにご意見ご協力いただいております。この度の渋谷謙三さんの急逝の報には、非常に驚き大きなショックです。

昨春、北里病院へ入院され、無事退院された後、お近くのグラウンドを何周も歩かれるというリハビリに励まれ、歩行力が増し、階段もスイスイ登られるようになられました。また、最近では、車の運転をされるまでに回復され、当会の定例会や会報印刷にも積極的に参加され、次回スケジュールの約束もありました。すっかりお元気な様子で、このままずっとご指導お付き合いいただけるとばかり信じきっていた矢先でした……。

思えば、謙三さんは、町田市民伝統の自由民権の心を持ち続けた方だったと思います。常に町田市政のより良い方向性を考え、大胆な提案、鋭い指摘など素晴らしいものがありました。鋭いご意見にたじたじされた面もあったことでしょうか、反面、相談を持ちかけられたことには真摯に受け止められ、謙三さんの協力なしには進まなかった場面が多く見受けられ、感謝されていた方も多くおられたでしょう。頼りになる方でした。

曲がったことが嫌いで、いつまでも少年のようなところもありました。ときには駄々っ子のように困らされたこともありましたが（謙三さんにはナイショナイショ）。今でもヒョッコリ現れるような気がしています。ご冥福を祈ります。

合掌

町田まちづくり市民会議 副議長 岩上誠次

謙三さんが亡くなりました。町田へきて、ほぼ40数年、人間的交流のあった方の初めての死でした。残念です。はじめ、まちネットでのお付き合いを通じ強烈な個性を感じました。ご自分のご意見と理想を常に持っている人でした。これからの町田に、ますます必要な人でした。私は、謙三さんからよい意味での「市民」を感じていました。いわゆる欧米流の市民です。戦後教育が理想とした市民です。それは、少しずつ消えていきつつありますが。

謙三さんは、早稲田での同級生寄本君から、町田で知り合ったのち、紹介を受けました。学生時代から、ごみの寄本の異名をもつ寄本君が評価する謙三さんの御本でした。惜しい方をなくしました。思い出すと目が覚めて、夜中の3時、この駄文をしたためています。厳しい中にも柔和な笑みを浮かべて…許して下さいましょう。

合掌

町田市民まちづくりネットワーク 座長 牧田義輝

渋谷さんに初めてお会いしたのは、まちづくり市民会議での都市計画マスタープランの議論の際、ごみ問題などに意見を出すために御招きしたときだったと思う。ところがその際に「ごみ問題に限定されるのではなく、まちづくり全体を考えたい」と、交通問題の分科会に参加されたことを記憶している。まちづくりを大きく広い視点で捉える大切さを思い知らされた。以来、暖かいながらときに厳しく、時にはかなり痛切に、そして時には本当に真剣な御指摘を頂いた。

最期にお会いした時にも、議会で議論中であつた「町田市自治基本条例」に意見すべきだ、と主張する私に対して、「何を問題とするのか。本当に何とかしたいのなら、議会リコールを市民に訴えてでもやる気があるのか」と問題への姿勢を指摘された。自分の甘さを見ぬかれた様で一時落ち込んだが、自らを見なおす良い機会を与えて頂けたと思う。

正直なところ、これからもっといろいろな事を教えていただけると期待していた。急なお別れが残念

でならない。後は自分で考えろ、と最期の課題を与えられたのだろうか。御冥福を祈るとともに、至らぬながら教え伝えていただいたものを生かしていくことが何よりの供養と信じてまちづくりなどに関わらせて頂こうと思う。

町田まちづくり市民会議 会員 桜井朋広

渋谷さんとは、まだ社会学専攻の学生だった 2005 年の夏に初めてお目にかかりました。団地建設ラッシュに揺れていた町田市が 1970 年に発表した『団地建設と市民生活（団地白書）』と 1973 年秋の市民祭「23 万人の個展」の存在を知り、それらについて調べるうちに「町田市役所企画課長渋谷謙三」氏のお名前を知りました。幸運にもほどなくして、母校の専修大学文学部教授、新井勝紘先生に森口克弘さんをご紹介いただきました。森口さんのお口添えで渋谷さんのお宅にうかがった日の緊張感は、町田市黎明期の重要な証言者に出会えたという高揚した気持ちとともに覚えています。渋谷さんの足跡をもとにして論文を書き終え、さらにこの地を調べようと町田に居を移した後もたくさんのご恩をいただきました。これは言葉に換えられないものです。まちづくりのリーダーとしてより、近年は厳しい父に対するような思いを渋谷さんに抱いていたのだと、眠るようなお顔にご挨拶させていただいたときに気づきました。最後まで渋谷さんにご心配をかけていた不孝を思いました。

ご自身の活動を単なる回顧として振り返ることを好まず、つねに次の「面白い」ことに向かい続ける渋谷さんは、私によく「前をみなきゃだめだよ」と発破をかけてくださいました。それでも私は、渋谷さんが若いときからどのような思いを糧に今日に至るまでまちづくりに携わっていらしたのか、渋谷さんが青年だった戦後から現在まで、郊外の都市化をどのような眼で見つめて生きてきたか、もっと聞きたいと思いつけてきました。もう少し私が成熟したら聞くこともかなうだろう、そう考えていました。ゆっくり構えすぎているのだろうか、と思うには早すぎる、受け止めきれない急な知らせでした。

弔辞のなかで青木幸雄さんは「お別れは言いません」とおっしゃいました。私もあの日、渋谷さんにひとまずのご挨拶は申し上げましたが、今後も渋谷さんと心の中で対話するつもりでお別れはしませんでした。渋谷さんの話をもっと聞きたいですとお願いをしたら、「俺の話、まだ聞きたいのかい。そんなんじゃだめだよ、有加ちゃん」とまた渋い顔をされるかな、と考えてみたら思わず背筋が伸びました。私のなかでは変わらず恐れ多い渋谷さんです。

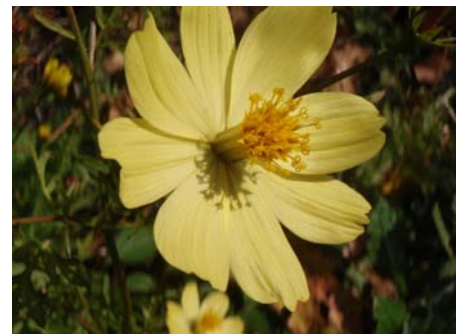
町田の扉を開いてたくさんの方々とお出合わせくださったこと、心から感謝申し上げます。

町田まちづくり市民会議 会員 向谷有加

「ごみゼロ市民会議」に於いての渋谷さんのご指導には大変お世話になりました。その時の事が、現在の私の NPO “たがやす” での『『生ごみ』の堆肥化作業』から有機肥料野菜作りの原点となっております。何時か、数ヶ月前に運転中の車中から渋谷さんが歩いているのを反対方向からお見かけし、お元気でお暮らしになっておられる姿を拝見しておりました。誠に残念に思います。謹んで渋谷さんのご霊前に借別の言葉を捧げさせていただきます。

思えば、渋谷さんは「ごみゼロ市民会議」の中心的存在でした。各部会の何事にもアドバイザーとして我々市民メンバーを溢れんばかりの情熱を持って引っ張ってくれました。その時に頂きました的確なセッションに心から感謝いたしますと共に、御仏の世界から我々市民メンバーのその後の活躍を見守って頂きたく、また、心中より涅槃寂靜をお祈り申し上げます。

町田市ごみゼロ市民会議 元市民委員 森山邦男



七国山の黄色コスモスを
渋谷さんのご霊前に捧げます(森山)

追 悼

渋谷謙三さんが残したもの

『まちづくりの環』前編集長 湯浅起夫

渋谷謙三さんと2010年12月7日（火）の町田まちづくり市民会議の定例会でお会いしてから2週間足らずでの訃報は、晴天の霹靂でした。

さかのぼれば、町田市のまちづくりマスタープランに大勢の市民が集まり、わいわいがやがや議論があり、市民版「マザープラン」ができる頃に出会い、私自身右も左も分からないままその他大勢の一員として、渋谷謙三さんが「町田まちづくり市民会議」をたちあげられた時に、参加していったのが始まりでした。熱に浮かされたようなブームが去り、会員も離合集散して、「町田まちづくり市民会議」として落ち着いてきたとき、会報を新しく発行しようということになり、私に編集を担当してくれとの話があったとき、何度も「力不足だから」とお断りしたのですが、結局、私が会報『まちづくりの環』編集の担当として2003年7月に第1号を発行してから、2007年12月の第52号まで毎月発行し、その後、私が病で入院手術してから井上さんにあとを引き受けてもらい、第53号から現在まで2011年1月の第89号へと続いています。

その間、渋谷さんは副議長～事務局長として会の発展に貢献されました。町田まちづくり市民会議が今日まで活動を続けてこられたのは、渋谷謙三さんの努力のたまものでした。とくに「町田のごみ問題」と「路面電車」には深い思い入れがあり、機会があるごとに持論を展開されていたことが思い出されます。

私が心筋梗塞で入院手術を受け、その後のリハビリで町田まちづくり市民会議をリタイアしている数年間、渋谷さんも脳梗塞で倒れられたと聞き心配していましたが、多少の後遺症があるものの元気に回復された由お聞きしていました。私が再び定例会に顔を出すようになったときには、以前と変わらない様子出ていらっしゃいましたので、安心しておりました。

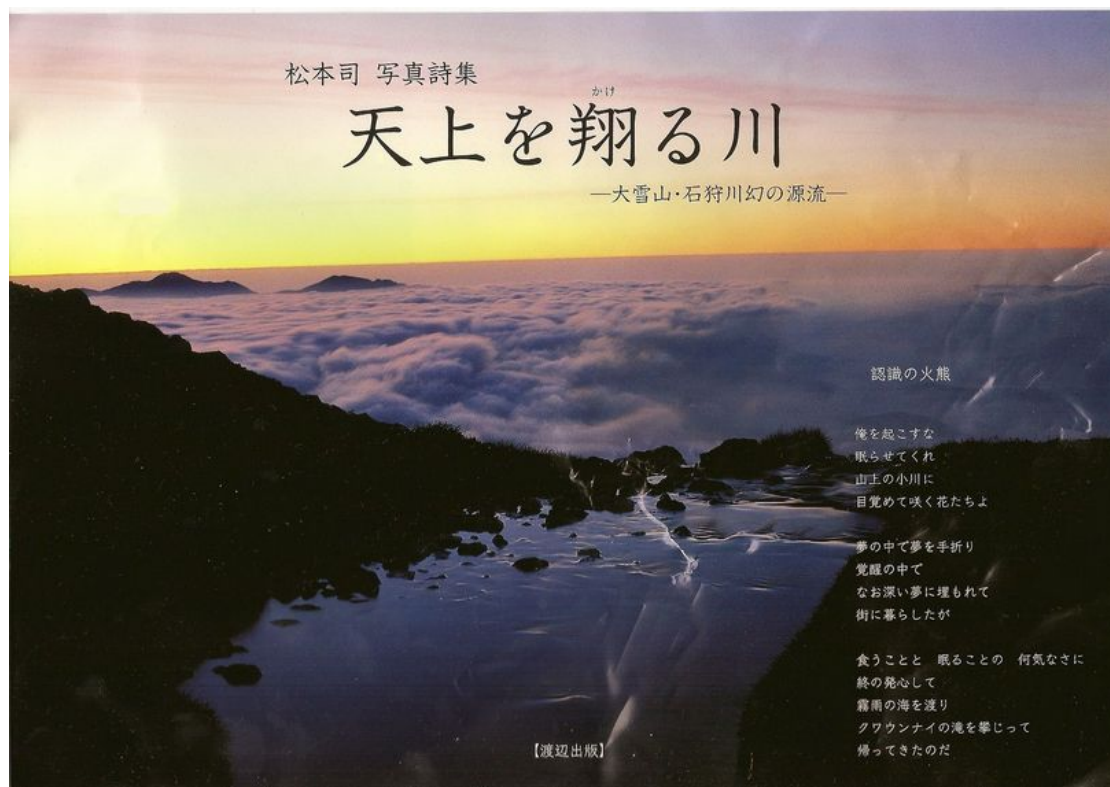
渋谷謙三さんの訃報の衝撃から覚めたとき、真っ先に私を捉えたのは、不幸にして志なかばで不帰の人となられ、「無念！」の思いでした。しかし、渋谷さんが残された町田まちづくり市民会議に課せられたテーマとして、渋谷さんの意思は、私たちの中に生きています。ご冥福をお祈りいたします。



2009年2月8日（日）、ごみゼロ市民会議の経験を元アドバイザーとして語る平塚市でのミニ講演会にて

町田の紙上個展・お宝紹介 シリーズ：3

松本司 写真詩集『天上を翔る川』（渡辺出版、2010年）



前町田市立博物館副館長であり、2008年11月におこなわれた「玉のよこやまアート&ウォーク」にも深く関わられた松本司さんは、フォトエッセイストとしての肩書をもつかわら、『風水ウォーキング——古代遺跡謎解きの旅』（小学館、1999年）という著作を刊行されているように日本古代史についてもたいへん造詣が深い方です。仕事との両立のなか大学院で日本史学を継続して修め、現在は國學院大学非常勤講師として第二の人生を歩まれています。その松本さんが、故郷四国のご家族の看病やご自身の脳梗塞など近年において立てつづけに苦難を経験されたのち、



著者の松本司氏(左)と森口克弘氏(中央)、渋谷謙三事務局長(右)

2010年5月27日(木)森野のそば屋「穂高」にて

座富士フォトサロン展「天上を翔る川」のポスターを差し上げます。携帯(090-1805-5392)までご連絡を。作家の石牟礼道子さんや写真家の関口照生氏らも高く評価する写真詩集、ぜひお手にとってその清冽な大雪山の風景と著者の魂の言葉に触れていただければと思います。

松本司 写真詩集『天上を翔る川——大雪山・石狩川幻の源流』（渡辺出版、2010年）本文カラー60頁、写真45点掲載。定価2,100円。

(今回の記事作成にあたって編集部が利用した広告ビラに破れや傷があったため、上掲の写真右側にノイズがありますが実際の掲載写真にはなく、実物はたいへん高画質であることを付記させていただきます。)

事務局だより

定例会のおしらせ

- ・2月の定例会は2月8日(火曜日)
13:00～より中央公民館ロビーを予定

いのちの山河・まちだ上映は成功!

桜井 朋広

生命尊重に尽くした村長（駄洒落みたいだが）の映画上映会（11/29）には、町田市民900人弱が参加した。試写会も含めれば優に千名を越える計算だ。

『いのちの山河～日本の青空Ⅱ』（大沢豊監督）は、貧しい岩手の川内村で全国初の乳児死亡ゼロを実現するまで、村人と闘った深沢村長の半生を描いた映画だ。

炭焼となめこに頼る村は、冬季に車が使えない大雪に苦しむ。医者もなきに等しく、赤ん坊が次々命を落とす。「大雪・病・貧乏」3悪の克服を訴えた深沢村長は、「都会帰り」と一部村人に揶揄されつつも日々「行脚と対話」で、皆と酒を酌み交わしつつ、要望や意見を聞いていく。「産業振興が先!」と反対する者がいても、除雪車導入と乳児・老人医療費無償化を優先した。

「医療費無償化は国保法違反では?」と県に反対されても、「憲法25条がある。最高裁まで争う!!」と貫徹した。病氣にならないと医者に來なかつた時代に、検診とカルテ保存で全村民の健康を管理する「地域包括医療」を当時先駆けて実現。今でこそ当たり前のように、その結果が全国自治体初の全乳児の死亡ゼロに繋がった。

予算も乏しく貧しい村で医療無償化を実現するのは相当の英断だったはずだ。「釜の火を消すど!」と産業振興派に非難されてもぶれずに通したのは、「健康で文化的な最低限度の生活」実現を村民の多くが支えたからだ。

この映画のラストシーンは、雪の中で多くの

村人が村長の棺を出迎えるシーン。この撮影に、大勢のボランティアが雪の中参加したそうだ。町田の上映会実現にも、多くのボランティアの尽力があった。これからの暮らしを支える取組にも、市民の力が欠かせない。それを改めて実感させてくれた映画であった。

いのちの山河～日本の青空Ⅱ公式ウェブサイト

<http://www.cinema-indies.co.jp/aozora2/index.php>

編集後記

「井上さん?渋谷です。あれ、ちょっと声がおかしいね。風邪引いたんじゃない?」そんなごくいつもの感じで渋谷事務局長からお電話をいただいたのは、12月17日の夜7時すこし前でした。新年1月号の印刷日を確認するご連絡で、締め切りまでには3ページ書きますから、といういつもと変わらぬやりとり。来年もよろしくお願ひしますとご挨拶したばかりでした。事務局長のあまりにも突然の永き不在に、気持ちの整理が追いついていないのが正直なところ。追悼号というかたちをとることも検討しましたが、事務局長と前号発行後から「松本司君の写真詩集が出たから紙上個展で紹介しよう」と何度もお電話で打ち合わせしたことを思い出し、また、会報発行を着実に継続することが事務局長の望むことではないかとあらためて考え、通常の紙面構成とさせていただきます。とは申せ、多くの方々に追悼のお言葉をお寄せいただきましたこと、ここに厚く御礼を申し上げます。

まちづくりの環

町田まちづくり市民議会会報
2011年1月11日第89号発行
発行者 佐藤東洋士
編集責任者 井上弘貴
事務局 常盤町桜美林大学内
TEL 042-797-6947
E-mail hiro_inouye@yahoo.co.jp